

制度の時間と若者の時間（巻頭エッセイ）

著者	押川 文子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	258
ページ	1-1
発行年	2017-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00048869

押川 文子

制度の時間と若者の時間

南アジアの若者の多くは今、学校には行ったものの「その先」がみえない、という深刻な現実に直面している。教育と就業との間の深い溝は、本特集でも様々な視点から取り上げられて、その実態や背景が論じられている。

しかし少し視点を引いてみると、教育が社会の変化や人々の期待に答えきれないという状況は、いつの時代にもあったし、インドに限ったことでもない。近代学校教育はいつも「問題」であり続けてきた。ごく少数の成功者を除けば、子どもたちや父母、教員など関わる多様な人々はそれぞれ不満をもち、その社会のその時代が必要とする次世代を過不足なく供給できたことは稀だった。しかもその不満は一樣ではなく、時として相対立する性格をもっている。問題である、と多くが感じるのに改革の方向の合意は見出せないというのが、教育「問題」の特性である。

こうした学校教育の本質的な困難の背景には、近代学校教育というシステムに幾層にも埋め込まれた複数の時間があるように思う。何らかの権力と空間を背景に設計運営される制度としての学校教育の時間は悠長である。教育制度は、膨大な施設、行政機構と教員、重なり合った理念や権益、学歴の正統性維持など、小回りが効かない強い慣性をもつ頑固な制度である。雇用市場の動向といったある程度具体的に捉えうる変化はともかく、経済活動や社会の変化に即して次世代が学ぶべき「知」のあり方に一定の合

意点を見出して改革を実施するには、長い時間を要する。やっと改革が軌道に乗っても、時代はすでにその先に行ってしまったかもしれない。

その一方で、学校教育の主役であるべき子どもたち、若者たちの時間は短い。どの子にとっても、待つこともやり直すこともできない一回勝負である。ただし短いとはいえ数年の時間があり、「学校後」を入学時に正確に測ることはできない。その数年の間にも社会は変化を続け、とくに社会資本や情報において不利な立場にある子どもや若者の多くは、漠然とした夢を抱いて過ごした十数年の学校生活のあとで、厳しい現実を知ることになる。学校生活そのものが、子どもたちの格差を拡大することもある。この数年という時間の間に、すべての子どもには、教育はその本来の目的であるはずの成長や平等で自由な将来を用意はしてくれないのである。

インドの現状は、この二つの時間が極端に作用している。もともと統合性を欠く教育システムは、部分的な修正や市場の本格的参入によって複雑なラビリンスの様相を呈している。数年前にはSF小説のなかだった人口知能が日々現実味をまし、「post truths」という言葉が不気味に響く時代に、子ども・若者たちは成長し、やがて社会に出る。何が本当に陳腐化しない教育なのか。教育と雇用の間の溝を少しでも埋めて、若者の将来と地域の発展に重ねるためには何が必要か。時計を合わせた改革が必要である。

おしかわ ふみこ／京都大学名誉教授

1950年生まれ。J. ネルー大学MA（歴史学）。アジア経済研究所、国立民族学博物館を経て京都大学地域研究統合情報センター教授（～2015年）。現代インド社会論。押川文子・南出和余編『「学校化」に向かう南アジア』（昭和堂、2016年）など。